

了賢撰『他師破決集』 訳注 (二) — 卷第一ノ二 —

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍従僧正了賢(一二七九〜一三四七)は、『仁和寺諸院家記』(心蓮院本)¹には、

了賢僧正 侍従、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、

附法八人

と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』(恵山書写本)²には、

了賢僧正 侍従、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、

於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禅助、但別座、貞和三

年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子であり、正安元年(一二九九)に仁和寺菩提院において了遍(一二二四〜一三一一)より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』⁴ 解題によれば、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。第二巻の奥書には、「元徳三年正月日、依¹大覚寺殿仰²注³進之¹。法印権大僧都了賢⁵」と記され、また、第五巻の奥書には、「正慶元年五月日、依¹大覚寺殿仰²注³進之¹。法印権大僧都了賢⁶」とある通り、元徳三年（一三三一）、正慶元年（一三三二）の頃に「大覚寺殿」⁷の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論稿はほとんどなく、また部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的とし、訳注を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺蔵古写本」を対校本とした、『真言宗全書』巻二一所収の本である。

凡例

一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。

二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることとした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。

三、条目には、『真言宗全書』解題（一二七頁上～一二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第一ノ二に収録される条目は次の通り。

三、釈迦外有大日別体否事

四、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と標記した。

五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注には
へゝを付した。

六、【**典拠**】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏経』↓大正、『卍統藏経』↓統藏、『大日本仏教全書』↓仏全、

『弘法大師全集』↓弘全、『真言宗全書』↓真全、『統真言宗全書』↓統真、

『定本弘法大師全集』↓定弘全、『統天台宗全書』↓統天全。

七、【**解説**】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

訳注研究

三、釈迦外有大日別体否事

【原文】

釈迦外有大日別体否事

智証疑問略鈔云、淨住寺海雲記云、金剛三藏和尚云、毘盧遮那、即釈迦牟尼。從法性身為名云云。今疑。三藏和尚実為有此説歟。今師、許之不。或云、顯・密二教皆一仏所説。隨機現身化物故。……(中略)……或真言師亦立別仏。天台智者説云、法身大果応用円満。極在妙覺不縱不横具足成就。乃至、明三身優劣者、皆不得意・得意為言。釈迦即遮那。故普賢觀經云、釈迦名毘盧遮那。或經云、或見釈迦、或見遮那。当知。法身遍一切処、応身滿法界。豈異釈迦別求遮那。就体為遮那、約用為釈迦。体・用廣大如法界、究竟如虛空文。

【訓読】

釈迦の外に大日の別体有るや否やの事

⁽¹⁾智証の『疑問略鈔』に云く、「⁽²⁾淨住寺海雲の『記』」に云く、「金剛三藏和尚の云く、毘盧遮那、即ち釈迦牟尼なり。法性身に從いて名と為す」と云云。

今疑う。三藏和尚に実此の説有りとやせん。今の師、これを許すや不や。

或るが云く、顯・密二教は皆一仏の所説なり。機に随つて身を現じて物を化するが故に。……(中略)……或る真言師は亦た別仏を立つ。⁽³⁾天台智者説いて云く、「法身の果は応用円満、極は妙覺に在りて不縱不横具足成就す。乃至、三身の優劣を明かさば、皆な不得意・得意なり為言。釈迦は即ち遮那なり。

故に『普賢觀經』に云く、「釈迦を毘盧遮那と名づく」と。或る『經』に云く、「或いは釈迦を見、或いは遮那を見る」と。当に知るべし。法身は一切処に遍じ、応身は法界に満つ。豈に釈迦に異んじて別に遮那を求めんや。体に就いて遮那と為し、用に約して釈迦と為す。体・用の広大なること法界の如く、究竟して虚空の如し」と文り。

【典故】

- (1) 智証の『疑問略鈔』：円珍（八一四～八九一）『些些疑文』卷上（仏全二七・一〇四一頁下～一〇四二頁上）。
 - (2) 浄住寺海雲の『記』：海雲（～八三四）『両部大法相承師資付法記』卷上（大正五一・七八三頁下）。
 - (3) 天台智者…智顛（五三八～五九七）『禪門章』（続蔵一・九九・二三丁右下～左上）。
 - (4) 『普賢觀經』…『觀普賢菩薩行法經』（大正九・三九二頁下）に、「釈迦牟尼名毘盧遮那遍一切処」とあることを指す。
 - (5) 或る『經』…詳細不明。『禪門章』では、「妙勝定云、或見「釈迦」、或見「遮那」と記され、『最妙勝定經』の引用として示されているが、『最妙勝定經』にこの文や類する文は見られなかった。
- 〔『最妙勝定經』のテキストは、猪崎直道「『最妙勝定經』考」（『駒澤大学佛教学部論集』二九、

一九九八）を用いた。）

また、智顛『法華文句』卷九下（大正三四・一二八頁上）には、「像法決疑經結『成涅槃』。文云、或見『釈迦』為『毘盧遮那』、或為『盧舍那』」と説かれ、類似する文が『像法決疑經』の文であると示されている。しかし、『像法決疑經』（大正八五・二八七〇番）本文にもこの文は見られない。

【解説】

この条目は、大日如来と釈尊が同体であるか、別体であるのかを問題とする、円珍の『些些疑文』の文に対する議論である。

『些些疑文』では、まず、海雲の『両部大法相承師資付法記』に、金剛智の説として「毘盧遮那は釈迦牟尼であり、法性身の観点から釈迦牟尼を毘盧遮那と名づける」と説かれていることを指摘する。その上で、これが本当に金剛智の説なのか、また、海雲はこの説を支持しているのかと疑問を呈する。これに対し、以下の三つの説を提示している。

- ① 顕教・密教はともに一仏の説であり、衆生の機根にしたがって教化をしているという説。
- ② 大日と釈尊を別の仏とするある真言師の説。
- ③ 智顛の『禪門章』に、「法身の果徳は円満で、最上であり、縦も横もなく全てを具足している。三身

の優劣を明かすならば、鈍根（不得意… 釈尊の教化）と利根（得意… 大日の教化）である。釈迦は大日なのである。よって『普賢觀經』に、「釈迦を毘盧遮那と名づける」と言うのである。また、ある經典には「あるいは釈迦を見、大日を見る」と説かれている。即ち、法身（大日）はすべてにいきわたり、応身（釈尊）は法界に満ちていると知るべきである。どうして釈迦の他に別に大日を求めるのであろうか。大日は本体、釈迦はその働きと捉えるのである」とある説。

すなわち、①③は大日と釈尊を同体と見る説、②は大日と釈尊を別体と見る説である。円珍は、智顛の説を用いている③の、大日と釈尊を同体と見る説を支持している。

【原文】

問。真言教意、釈迦外存大日別体可云耶。 答。尔。

【訓読】

問う。真言教の意、釈迦の外に大日の別体を存すと云うべしや。 答う。尔なり。

【解説】

先の円珍『些些疑文』巻上の記述を受け、「真言密教では釈迦と大日を別体と見るのか」と質問する。これに対し、「真言密教では釈迦と大日を別体と見る」と主張する。

【原文】

疑云、高祖大師解釈中、釈迦三身・大日三身各各不同_又。就之案出生義意、釈迦却住自受用身名大日。更非別仏。是以普賢觀經說釈迦亦名毘盧遮那、守護經釈迦菩薩成仏号毘盧遮那仏見。加之、一代仏教意、釈迦外不立仏。適雖有多宝等尊、皆是釈迦之變化。又釈迦出世以後真言教出現。豈非釈迦・大日同仏之支証耶。何況大日經中、於大日或名釈迦師子、或名牟尼、專顯此意歟。明知。以釈迦之法身為大日、以大日之化身名釈迦歟。然者難思。如何。

【訓読】

疑いて云く、高祖大師の解釈中に、「釈迦の三身・大日の三身は各各不同なり」と文り。これに就いて『出生義』の意を案ずるに、釈迦の却りて自受用身に住するを大日と名づくなり。更に別の仏に非ず。是を以て『普賢觀經』には「釈迦を亦た毘盧遮那と名づく」と説き、『守護經』には「釈迦菩薩の成仏するを毘盧遮那仏と号す」と見えたり。しかのみならず、一代仏教の意は、釈迦の外に仏を立てず。適

に多宝等の尊有りと雖も、皆な是れ釈迦の変化なり。又釈迦出世の以後に真言教出現す。豈に釈迦・大日同仏の支証に非ざらんや。何に況んや『大日経』⁽⁵⁾中に、大日に於いて或は釈師子と名づけ、或は牟尼と名づくるは、専ら此の意を顕わすか。明らかに知んぬ。釈迦の法身を以て大日と為し、大日の化身を以て釈迦と名づくるか。然らば思い難し。如何。

【典拠】

- (1) 高祖大師の解釈…空海(七七四〜八三五)『弁頭密二教論』卷下(弘全一・五〇三頁)。
- (2) 『出生義』の意…『金剛頂三十七尊出生義』(大正一八・二九七頁下)に、「我能仁如来、憫三有・六趣之惑、常由三蘊・界・入等、受三生死妄執、空華無而虚計、衣珠有而不_レ知。於_レ是乎、收_二跡都史天宮_一、下_二生中印土_一、起_二化城_一以接_レ之、由_二糞除_一以誘_レ之。及乎大種姓人、法縁已熟、三秘密教説時、方至。遂却住_二自受用身_一、擲_二色究竟天宮_一、入_二不空王三昧_一、普集_二諸聖賢_一、削_二地位之漸階_一、開_二等・妙之頓旨_一とあることを指す。この文は、本条目の後半に「釈迦と大日を同体と見る」立場の証文として引用されているため、詳細は後述する。
- (3) 『普賢観経』…『観普賢菩薩行法経』(大正九・三九二頁下)に、「釈迦牟尼名_二毘盧遮那遍一切処_一とあることを指す。
- (4) 『守護経』…『守護国界主陀羅尼経』卷九(大正一九・五七〇頁下)に、「我於_二無量無數劫中_一、

修集如_レ是波羅蜜多_二、至_二最後身_二六年苦行、不_下得_二阿耨多羅三藐三菩提_一成_中大毘盧遮那_上。坐_二道場_一時、無量化仏猶如_二油麻_一遍_二滿虛空_一。諸仏同声而告_レ我言、善男子云何求_二成正覺_一。我白_レ仏言、我是凡夫。未_レ知_二求處_一。唯願慈悲為_レ我解說。是時仏同告_レ我言、善男子諦聽。當_二為_レ汝說_一。汝今宜_下於_二鼻端_一想_二月輪_一、於_二月輪中_一作_レ唵字觀_上。作_二是觀_一已、於_レ後夜分_二得_レ成_二阿耨多羅三藐三菩提_一とあることを指す。この文は、本条目の後半に「釈迦と大日を同体と見る」立場の証文として、『秘藏宝鑰』の文として引用されているため、詳細は後述する。

(5) 『大日経』…例えば、『大日経』卷一(大正一八・四頁中、七頁下)等では、大日如来を「釈師子」としている。また『大日経』卷一(大正一八・二頁上)等では、大日如来を「牟尼」としている。

【解説】

先の問答で、「真言密教では釈迦と大日を別体と見る」という答えを受けての重難。

ここでは、まず空海の『弁頭密_二教論_一』に「釈迦の三身と大日の三身はそれぞれ異なっている」という文を引く。この文について、『金剛頂三十七尊出生義』を見ると、「釈迦が自受用身に住している場合、これを大日と名づける」と説かれているとして、空海はあくまでも名称が不同であると説いたと主張する。以下、『普賢観経』の「釈迦を毘盧遮那と名づける」、『守護国界主陀羅尼経』の「釈迦菩薩は成仏して毘盧遮那と号した」との文を根拠として、大日と釈尊とが同体であると主張する。

更に一代仏教とは、釈迦の一生涯中の教えであって釈迦以外に仏を立てることはせず、わずかに多宝仏等の名は見られるものの、それらはみな釈尊の変化であると主張する。また、釈尊が出生してから真言密教が出現した（釈尊以前に密教はなかった）こと、『大日経』に、大日如来を「釈師子」や「牟尼」と呼称していることを根拠として、大日が釈迦と団体であることを強調する。最後に、釈尊の法身が大日、大日の化身が釈尊であるとして、これはあくまでも名称の違いであることを主張するのである。

【原文】

答。大日者本質仏、釈迦者影像尊也。故聖位経大日為天上教主、釈迦為天下教主。是如次、中位法界宮常住之法仏、北方生滅穢土之教主也。依之深淺遥異、本末大別。更非団体仏。是以胎藏曼荼羅、以大日置中台、以釈迦安第三重。金剛頂礼懺、淨妙法身摩訶毘盧遮那之外出作變化身釈迦牟尼仏。加之、守護経・梵網経、以大日為能化、以釈迦為所化。何約釈迦法身之辺立大日之号耶。但於条条疑難者、出生義捨影像身却住本質身之義也。守護経約本質・影像一致之辺。因位者迷位故約影像名釈迦菩薩、果位者覺位故依本質号毘盧遮那。於教法出現同時者、本質・影像必相応俱有故、釈尊教法与大日教法同時也。同仏故非俱時。於大日経文者、釈迦牟尼翻能寂。是仏之通名也。必非指一代教主歟。宝鑰上云、作・遷・慢・如・真・乘寂。寂者寂默也。即釈迦牟尼翻名也。是於法曼荼羅身仏立釈迦牟尼名。全非一代教主。

或又、約本迹同体之辺、於大日立釈迦号歟。凡智証等意、雖伝真言傍流故、纔伝外用不知内証。仍成顕密理同之義、其義猶不出顕網。故以一代釈尊通為顕密教主。東寺意、高祖独為惠果鴻瓶、究大日内証故、影像釈迦之外存本質大日体。尤不共之所談也。学者可悉之。

【訓読】

答う。大日とは本質の仏、釈迦とは影像の尊なり。故に『^①聖位經』に大日を天上の教主と為し、釈迦を天下の教主と為す。是れ次での如く、中位法界宮常住の法仏と、北方生滅穢土の教主となり。これに依りて深淺遙かに異なり、本末大いに別なり。更に同体の仏に非ず。是を以て胎藏曼荼羅には、大日を以て中台に置き、釈迦を以て第三重に安ず。『^②金剛頂禮懺』には、「淨妙法身摩訶毘盧遮那」の外に「作變化身釈迦牟尼仏」を出だす。しかのみならず、『^③守護經』・『^④梵網經』に、大日を以て能化と為し、釈迦を以て所化と為す。何ぞ釈迦法身の辺に約して大日の号を立てんや。

但し条条の疑難に於いては、『^⑤出生義』は影像の身を捨てて却て本質の身に住するの義なり。『^⑥守護經』は本質・影像一致の辺に約す。因位とは迷位の故に影像に約して釈迦菩薩と名づけ、果位とは覺位の故に本質に依りて毘盧遮那と号す。教法出現の同時なるに於いては、本質・影像は必ず相応し俱有なるが故に、釈尊の教法と大日の教法とは同時なり。同仏なるが故に俱時なるに非ず。『^⑦大日經』の文に於いては、釈迦牟尼を能寂と翻ず。是れ仏の通名なり。必ずしも一代教主を指すに非ざるか。『^⑧宝鑰』上に

云く、「作・遷・慢・如・真・乗の寂」と文り。寂とは寂黙なり。即ち釈迦牟尼の翻名なり。是れ法曼荼羅身の仏に於いて釈迦牟尼の名を立つ。全く一代の教主に非ず。或は又、本迹同体の辺に約して、大日に於いて釈迦の号を立つるか。凡そ智証等の意は、真言を伝うと雖も傍流なるが故に、纔に外用を伝えて内証を知らず。仍て顕密理同の義を成じ、其の義猶お顕網を出でず。故に一代釈尊を以て通じて顕密の教主と為す。東寺の意は、高祖独り恵果の瀉瓶と為し、大日の内証を究むるが故に、影像釈迦の外に本質大日の体を存す。尤も不共の所談なり。学者これを悉くすべし。

【典故】

(1) 『聖位経』…『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』(以下『分別聖位経』)には、「大日如来が天上の教主、釈迦が天下の教主」との表現は見られない。これは『分別聖位経』の「序」(大正一八・二八八頁上)に、「然如来变化身、於閻浮提摩竭陀国菩提場中、成_レ等正覚_一。……(中略)……王宮生、双林滅。遺身舍利起_レ塔供養、感_レ受人天勝妙果報、及涅槃_一。不_レ同_二報身毘盧遮那_一。於_二色界頂第四禪阿迦尼吒天宮_一、雲集尽虚空・遍法界一切諸仏、十地満足諸大菩薩証明、警覚身心、頓証_二無上菩提_一。【和訳】「如来の变化身(＝釈尊)は、閻浮提の摩竭陀国の菩提樹下でさとりを得た。……(中略)……釈尊は王宮に生まれ、沙羅樹の林で入滅された。その舍利に塔を立てて供養すれば、人天のすぐれた果報や涅槃に入るための因を得ることが出来る。この釈尊

は報身の毘盧遮那とは同じではない。色界の頂である阿迦尼吒天において雲集する一切の諸仏・菩薩を証明者として、身心を驚覚させ、速やかに最上なるさとりを得るのである。」とあることを指すか。

- (2) 『金剛頂礼懺』…『金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如来自受用身内証智眷属法身異名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』(大正一八・三三六頁上)。「大正新脩大藏經」では「南謨常住三世淨妙法身金剛界大悲毘盧遮那仏。……(中略)……南謨作變化身不空成就仏」となっているが、対校本である④『三十帖策子』第二〇では、「不空成就」が「釈迦牟尼」となっているようである。

- (3) 『守護經』…『守護国界主陀羅尼經』卷九(大正一九・五六五頁下)に、「仏告秘密主言、善男子、毘盧遮那世尊、色究竟天為天帝釈及諸天衆已広宣説。我今於此菩提樹下金剛道場、為諸国王及与汝等略説於此陀羅尼門」とあることを指す。この文は、本条目の後半に「釈迦と大日を別体と見る」立場の証文として(『弁頭密二教論』の文として)引用されているため、詳細は後述する。

- (4) 『梵網經』…『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品第十』卷下(大正二四・一〇〇三頁下～一〇〇四頁上)に、「我今盧舍那、方坐蓮華台、周匝千華上、復現千釈迦。一華百億国、一国一釈迦、各坐菩提樹、一時成仏道。如是千百億、盧舍那本身、千百億釈迦、各接微塵衆。俱來至我所、聽我誦仏戒。甘露門則開。是時千百億、還至本道場、各坐菩提樹、誦我本師戒、

十重四十八」とあることを指す。この文は、本条目の後半に「釈迦と大日を別体と見る」立場の証文として引用されているため、詳細は後述する。

(5) 『出生義』…『金剛頂三十七尊出生義』(大正一八・二九七頁下)。

(6) 『守護経』…『守護国界主陀羅尼経』卷九(大正一九・五七〇頁下)。

(7) 『大日経』…『大日経』卷一(大正一八・七頁下)に、「次於世尊右_レ顯_二示遍知眼_一。熙怡相微笑。

遍体円淨光、喜見無比身。是名_二能寂母_一。【和訳】「第二院東方の初門に釈迦牟尼を画いた後」次に釈迦牟尼の右に仏眼仏母を顯せ。やわらぎ喜ぶ相で微笑している。身体に淨らかな光をまとい、すばらしき無比の身である。これを釈迦牟尼の母、すなわち摩耶夫人と名づける。」とあり、釈迦の母である摩耶夫人を「能寂母」と称している。すなわち、「能寂」は釈迦を指す。

(8) 『宝鑰』上…空海『秘藏宝鑰』卷上(弘全二・四一九頁)。

【解説】

先の難を受けての回答。答者は、まず大日を本質、釈迦を影像と規定して、それは『分別聖位経』に「大日如来を天上の教主、釈迦を天下の教主」とあることが根拠であるとする。またこれにしたがって、大日は中央の法界宮に常住する法身仏、釈迦を北方の生滅穢土界の教主であるとする。つまり、釈迦と大日には浅深、本末の別があるため、同体ではないと主張している。

このことにより、胎藏曼荼羅では中台に大日、釈迦を第三重に置くのであり、また『金剛界礼懺』では、「法身摩訶毘盧遮那仏」とは別に「変化身釈迦牟尼仏」と説くのだとする。またそれだけではなく、『守護国界主陀羅尼經』・『梵網經』では、大日を能化、釈迦を所化としてしていると主張している。

ただし難については、『二十七尊出生義』の「釈迦が自受用身に住している場合、これを大日と名づける」というのは、影像の身（釈迦）を捨てて本質の身（大日）に住することを指すのだとし、また『守護国界主陀羅尼經』の「釈迦菩薩は成仏して毘盧遮那と号した」というのは、本質（大日）と影像（釈迦）を一致させる観点から論じているのだとする。これは「因位 \parallel 迷位 \parallel 釈迦（影像）」、「果位 \parallel 覚位 \parallel 大日（本質）」であるためである。大日と釈迦の教法の出現が同時であるならば、必ず本質（大日）と影像（釈迦）は相応し俱有であるため、釈迦と大日の教法は同時に起こるのであり、釈迦と大日とが同体であるから同時なのではないと主張する。

また『大日經』において、大日如来を「釈師子」や「牟尼」と呼ぶことについては、釈迦牟尼のことを「能寂」と呼ぶ文も存在する。この能寂というのは、仏の通名であり、必ずしも人間界に現れた一代教主の釈迦牟尼を指しているわけではないとする。このことについては『秘藏宝鑰』に「作・遷・慢・如・真・乗の寂」と説かれ、この寂とは寂黙という意味である。つまりこれは釈迦牟尼の翻名である。これは法曼荼羅身の仏に対して釈迦牟尼と名づけているのであり、一代教主の釈迦牟尼ではないと主張する。これについては、本地と垂迹を同体と見るといふ観点より、大日に釈迦の名を与えているので

はないかとしている。

そして、円珍の見解については、円珍（台密）は密教を伝えたとはいえ傍流であるため、わずかな外用のみを伝えるにとどまって内証を知らないとし、顕密の理は同じであるという顕網を出でていないと断ずる。この誤りにより、人間界に現れた一代教主釈迦牟尼を顕密の教主であるとしてしまったのである。

これに異なり東寺（東密）の見解は、空海が唯一の恵果の写瓶であり、大日如来の内証を究めた人物であるとの立場をとるので、影像の釈迦の外に本質の大日の体を存するのでであると主張するのである。

【原文】

一。以守護経意見教王経、釈迦菩薩即一切義成就菩薩也。然者釈迦与大日可同体。所以者何、釈迦菩薩之果者釈迦、一切義成就菩薩之果者大日故也。

会云、凡真实仏者大日也。仍両経同歴五相成大日。雖然為迷機還垂迹成釈迦身。顕機見此迹為実故、但知釈迦不知大日。約此辺守護経以悉達太子名釈迦菩薩也。教王経約実見大日故、以彼因位太子名一切義成就菩薩也。

問。見義決文、一切義成就菩薩、入無識身三昧者顕教極理也。然者彼菩薩、豈非釈迦因位哉。明知。釈

迦・大日同体故、押釈迦因位為大日因位歟。如何。

答。於此三昧有淺・深二義。若依淺略義者、顯教極理也。表從顯入密之義。先入此三昧、次經五相成大日。義決漸學大乘者此義也。以顯為小乘、以密為大乘故、從顯入密之人名漸學大乘者。若釈迦・大日同体故入此三昧者、何過此三昧經五相成仏耶。釈迦以顯極理可為至極故也。若約深秘者、義決中以彼三昧釈大空三昧。故因果共大日事業、非釈迦境界。真言問答以金剛薩埵為即身成仏人此意也。理趣經云、一切義成就金剛手菩薩^文。是一切義成就菩薩即大日因位之支証也。

【訓読】

一。『守護經』⁽¹⁾の意を以て『教王經』⁽²⁾を見るに、釈迦菩薩は即ち一切義成就菩薩なり。然らば釈迦と大日とは同体なるべし。所以いかんとなれば、釈迦菩薩の果は釈迦、一切義成就菩薩の果は大日なるが故なり。

會して云く、凡そ真実仏とは大日なり。仍て両經は同じく五相を経て大日と成る。然りと雖も迷機の為に垂迹に還って釈迦の身と成る。顯機は此の迹を見て実と為すが故に、但だ釈迦を知りて大日を知らず。此の辺に約して『守護經』は悉達太子を以て釈迦菩薩と名づくなり。『教王經』は実⁽³⁾に約して大日と見るが故に、彼の因位の太子を以て一切義成就菩薩と名づくなり。

問う。『義決』⁽³⁾の文を見るに、一切義成就菩薩、無識身三昧に入るとは顯教の極理なり。然らば彼の

菩薩、豈に釈迦の因位に非ざるや。明らかに知んぬ。釈迦・大日同体の故に、釈迦の因位を押さえて大日の因位と為すか。如何。

答う。此の三昧に於いて浅・深の二義有り。若し浅略の義に依らば、顕教の極理なり。從顕入密の義を表す。先ず此の三昧に入り、次に五相を経て大日と成る。『義決』の「漸学大乘」とは此の義なり。顕を以て小乗と為し、密を以て大乘と為すが故に、從顕入密の人を「漸学大乘者」と名づく。若し釈迦・大日同体の故に此の三昧に入れば、何ぞ此の三昧を過ぎて五相成仏を経んや。釈迦は顕の極理を以て至極と為すべきが故なり。若し深秘に約せば、『義決』の中に彼の三昧を以て大空三昧と積す。故に因果共に大日の事業にして、釈迦の境界に非ず。『真言問答』に「金剛薩埵を以て即身成仏の人と為す」とは此の意なり。『理趣經』に云く、「一切義成就金剛手菩薩」と文り。是れ一切義成就菩薩は即ち大日の因位の支証なり。

【典拠】

- (1) 『守護經』…『守護国界主陀羅尼經』卷九(大正一九・五七〇頁下)を指す。
- (2) 『教王經』…『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王經』卷上(大正一八・二〇七頁下)二〇八頁上に、

尔時一切如来雲集、於一切義成就菩薩摩訶薩坐菩提場、往詣示現受用身、咸作是言。

等持」と言うべきである」とあることを指す。

(4) 『義決』…『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上(大正三九・八一三頁上)。

(5) 大空三昧…大日如來の三摩地のこと。『大日經疏』卷四(大正三九・六二二頁下)に、「如來住此大空三昧」とある。

(6) 『真言問答』…『雜問答』(弘全四・一五七頁)に、「問。既聞_二文証_一。若如是者、誰人修_二行此三摩地法_一即身成仏。指_レ人_二是誰人耶_一。答。其人_二數多_一。暫指_二金剛薩埵_一為_二其人_一耳」【和訳】「問う。既に即身成仏の証文を見聞した。もしこの文の如くであるならば、誰がこの三摩地の法を修行して即身成仏したのか。人で示すならば誰であるか。答える。即身成仏した人は多くいる。ここでは仮に金剛薩埵を即身成仏した者とする。」とあることを指す。尚、『雜問答』を『真言問答』と表記することについては、『雜問答』の奥書(弘全四・二〇二頁)に詳しい。

此書無_二内題_一。其外題或云_二雜問答_一、或云_二真言問答_一。諸宗章疏錄云、真言問答書四卷。又云、真言雜問答書一卷。是指_二今本也_一。四卷・一卷、恐調卷不同歟。列為_二二部_一者、蓋謬歟。

【和訳】この書に内題は無い。その外題にはあるいは「雜問答」といい、またあるいは「真言問答」という。『諸宗章疏錄』卷三(弘全一・一五七頁下)には、「真言問答書四卷」とあり、また「真言雜問答書一卷」とある。これは今の本を指している。四卷と一卷の相違は、恐らくは調卷の不同であろう。『諸宗章疏錄』に四卷本と一卷本を列ねるのは、恐らく誤り

であろう。

(7) 『理趣經』…『大樂金剛不空真実三摩耶經』(大正八・七八四頁中)。

【解説】

これより以下は、「釈迦と大日を同体と見るか否か」を問題とした問答が三つ続いている。これらが実際に行われた論議の記録なのかは不明であるが、先の問答と同様に、問者が「釈迦・大日同体」の立場、答者が「釈迦・大日別体」の立場である。

問者は『守護国界主陀羅尼經』の「釈迦菩薩は成仏して毘盧遮那と号した」という観点より『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經』に説かれる五相成身觀をみると、『守護經』の釈迦菩薩は『教王經』の一切義成就菩薩である。したがって釈迦と大日は同体である。なぜならば、釈迦菩薩の果は釈迦、一切義成就菩薩の果は大日であるためである」と主張する。問者の主張を図示すれば、次のようになる。

釈迦菩薩⇌一切義成就菩薩

⇐

釈迦菩薩(⇌一切義成就菩薩) ↓ 釈迦

一切義成就菩薩(⇌釈迦菩薩) ↓ 大日

この質問に対し答者は、「真実の仏は大日であり、『守護経』・『教王経』共に、（釈迦菩薩も一切義成就菩薩も）五相成身觀を経て大日如来となっている。ただし、迷機のために垂迹するため、大日は釈迦の身となる。これは顕教の機の者が、この釈迦の垂迹を真実であると捉えるためである。顕機は釈迦のみを知って大日を知らないのである。この「顕機・迷機のため」という観点から、『守護経』では悉達太子を釈迦菩薩と名づけているのである。『教王経』は、真実の仏は大日であるという観点から、因位の悉達太子を一切義成就菩薩と名づけるのである」と主張する。

これに対し問者は、『金剛頂経義決』において「一切義成就菩薩が無識身三昧（阿娑婆那訶三摩地）に入る」と説かれているのは、これは顕教の極理を指している。したがって、一切義成就菩薩がどうして釈迦の因位でないことがあるのか（一切義成就菩薩は釈迦の因位である）。すなわち、釈迦と大日は同位であるので、『教王経』は釈迦の因位であることを押さえて、一切義成就菩薩を大日の因位としているのではないか」と難を重ねる。

この難に対し答者は、「無識身三昧（阿娑婆那訶三摩地）には浅略・深秘の二義がある。浅略の観点によれば、無識身三昧は顕教の極理である。この三昧に入った後に五相成身觀を経て大日となるという、

顯教より密教へと入ることを示している。『金剛頂經義決』の「漸く大乘を学ぶ」というのは、この從顯入密のことを指している。『金剛頂經義決』では、顯教を小乗、密教を大乘としているので、從顯入密の人を「漸く大乘を学ぶ者」と名づけるのである。もし釈迦と大日とが同体であるならば、無識身三昧の後に五相成身觀を経る必要はないのではないか。釈迦は顯教の極理を至極としているので、大日と同体ではない。また、深秘の觀点によれば、『金剛頂經義決』には、無識身三昧のことを大空三昧と解釈している。これは大日如來の三摩地である。したがって、因果共に大日如來の事業であり、釈迦の境界ではない。『真言問答』（『雜問答』）に「金剛薩埵（因位）を即身成仏の人（果位）とする」というのはこのことである。また、『大樂金剛不空眞實三摩耶經』に「一切義成就金剛手菩薩」といっている。これは一切義成就菩薩が大日如來の因位（＝金剛薩埵、金剛手）であることの証拠である」と反論し、釈迦と大日とが別体であることを強調している。

【原文】

一。凡案仏教意、釈迦之外無他仏歟。縱雖有之皆是釈迦之變作也。是以法華意、多宝並織芥塵數菩薩皆是釈迦応化。是以大師理觀啓白云、諸仏悟故、会多一仏。尔者如何。

会云、仏教意、以釈迦為本者顯教意也。若一代釈迦説之外有經教者、可違此性相歟。法華者釈尊之極説

故、以釈迦為本、一切皆定彼応現。真言者大日之内証故、又大日為本、以十方諸仏可為垂迹。法華所判還為今所立潤色歟。於理觀啓白者、衆生隔歷不融為體、諸仏平等無礙為體。故釈尔也。具文云、衆生迷故、成多衆生、諸仏悟故、会多一仏[※]。非云釈迦之外無大日也。

【訓読】

一。凡そ仏教の意を案ずるに、釈迦の外に他仏無きか。縦いこれ有りと雖も皆な是れ釈迦の変作なり。是を以て『法華』の意は、多宝並びに織芥塵数の菩薩は皆な是れ釈迦の応化なり。是を以て大師の『理觀啓白』に云く、「諸仏は悟れるが故に、多を一仏に会す」と文り。尔らば如何。

会して云く、仏教の意、釈迦を以て本と為すとは顕教の意なり。若し一代釈迦説の外に経教有らば、此れ性相に違ふべきか。『法華』は釈尊の極説なるが故に、釈迦を以て本と為し、一切皆な彼の応現と定む。真言は大日の内証なるが故に、又大日を本と為し、十方の諸仏を以て垂迹と為すべし。『法華』の所判は還て今の所立の潤色と為るか。『理觀啓白』に於いては、衆生は隔歷不融を體と為し、諸仏は平等無礙を體と為す。故に尔りと積するなり。具^②なる文に云く、「衆生は迷えるが故に、多の衆生と成り、諸仏は悟れるが故に、多を一仏に会す」と文り。釈迦の外に大日無しと云うには非ざるなり。

【典拠】

(1) 『理観啓白』…『念持真言理観啓白文』(弘全二・一八六頁)。ただし、『弘法大師全集』巻二、ならびに『定本弘法大師全集』巻五所収の『念持真言理観啓白文』(弘全二・一八六頁、定弘全五・九七頁)では「諸仏悟故、会成一仏」となっており、若干の相違がみられる。

(2) 具なる文…『念持真言理観啓白文』(弘全二・一八六頁)。

【解説】

追加された問答の二つめ。問者は、「仏教の意味を考えてみるに、釈迦の他には仏はいないのでないか。もし他仏があったとしても、これらは全て釈迦の変化したものである。これによって、『法華経』では、多宝仏や数々の菩薩たちを全て釈迦の応化であるとする。さらに空海の『念持真言理観啓白文』では、「諸々の仏は悟っているため、全てを一仏にあてるのである」といつている。つまり、他仏はすべて釈迦であるため、釈迦と大日は同体である」と主張する。

これに対し答者は、「仏教の意といっても、釈迦を本とするのは顕教の意である。もし人間界に現れた一代教主の釈迦牟尼が説いたもの他に、経や教えがあるならば、それは本体とその働きとは相違する、と考えるべきなのではないか。『法華経』は釈尊の究極的な教えなので、釈迦を本として、その他すべては釈迦の応現であるとする。真言密教の場合は大日如来の内証であるから、大日如来を本とし、他の諸仏によって垂迹するのである。問者が『法華経』では、多宝仏や数々の菩薩たちを全て釈迦の

応化である」と言うのは、還ってこちら（答者）の見解の補足となるものである。また『念持真言理観啓白文』については、衆生は隔歴不融、諸仏は平等無礙を体としているので、「諸仏は悟っているため全てを一仏にあてる」と解釈しているのである。『念持真言理観啓白文』の文は、「衆生は迷っているので多くの衆生となり、諸仏は悟っているので多仏を一仏にあてる」である。このように『念持真言理観啓白文』の文は衆生と仏との対句であるため、この文は「釈迦の他に大日はいない」という根拠にはなり得ないのである。」と反論する。

【原文】

一。於釈迦有三身。法身豈非大日乎。依之海雲述此義歟。又貞元録称釈教新定目錄彼載兩部大經。是非同体耶。

会云、於釈迦之法身有顯・密二義。顯教意談無色無形。如何為智拳法界大日。密教意雖存色形、北方字門法門故、異中台塔婆總德。更以彼法身不可混乱大日。於海雲阿闍梨義者、彼師吳殷纂中名字猶以不載之。況為指南相对高祖定判耶。貞元録名字者、約多分立釈教号。強非難義哉。

【訓読】

一。釈迦に於いて三身有り。法身豈に大日に非ざらんや。これに依りて海雲は此の義を述ぶるか。又『貞元録』⁽¹⁾には「釈教新定目録」と称して彼の両部の大経を載す。是れ同体に非ざらんや。

会して云く、釈迦の法身に於いて顕・密の二義有り。顕教の意は無色無形と談ず。如何ぞ智拳法界大日とせん。密教の意は色形を存すと雖も、北方⁽²⁾を字門の法門なるが故に、中台塔婆の総徳と異なれり。更に彼の法身を以て大日と混乱すべからず。海雲阿闍梨の義に於いては、彼の師は呉殷⁽²⁾の『纂』の中に名字猶お以てこれを載せず。況んや指南と為して高祖⁽³⁾の定判に相對せんや。『貞元録』の名字は、多分に約して「釈教」の号を立つ。強ちに難義するに非ざるか。

【典故】

(1) 『貞元録』…『貞元新定釈教目録』卷一(大正五五・七七二頁上)に、「金剛頂瑜伽真実大教王經三卷」とあり、また同卷二二(大正五五・九三五頁上)に、「大毘盧遮那成仏神變加持經七卷」とあることを指す。「釈教新定目録」とは、具名の「新定釈教目録」を指す。

(2) 呉殷の『纂』…呉殷とは恵果の俗弟子である。海雲『金胎兩界師資相承』(続藏一・九五・四九六丁右く左)には、恵果の弟子として「空海」・「義操」等を挙げる中に、「俗居士呉殷」と記され、呉殷の名を確認することができる。

また、呉殷の『纂』とは、「恵果阿闍梨の行状」のことであり、空海『秘密曼荼羅教付法伝』

- 卷二には、「于_レ時有_二山人逸士吳殷_一。略_{ツク}修_二和尚行状_一曰、大唐神都青龍寺東塔院灌頂国師惠果阿闍梨行状 弟子吳殷纂」(弘全一・四三頁)とある。この行状では、惠果の弟子として「惠日」・「義円」・「義明」・「空海」の名を挙げるものの、海雲の師である義操の名が記されていない。なお、『他師破決集』巻二や『~~五~~鈔』巻八には「吳殷纂用否事」という条目が収録されている。
- (3) 高祖の定判…空海『弁頭密二教論』巻下(弘全一・五〇三頁)の「釈迦三身・大日三身各各不同」を指す。

【解説】

追加された問答の三つめ。問者は、「釈迦には三身があり、この中の法身がどうして大日でないことであろうか。釈迦の法身が大日であるということによって、海雲は「毘盧遮那は釈迦牟尼であり、法性身の観点から釈迦牟尼を毘盧遮那と名づける」と説いたのである。また『貞元新定釈教目録』の「釈教新定目録」は、「釈迦の教えを新たに定めた目録」という意味であり、ここに『大日経』・『金剛頂経』の両部大経の名を掲載している。「釈迦の教えの目録」に大日の説いた両部大経が掲載されているのだから釈迦と大日は同体なのである」と主張する。

これに対し答者は、「釈迦の法身には顕・密の二義があり、このうちの顕教の義では、法身は無色無形である。どうして智拳印を結んだ大日如来とすることができようか。密教の義では釈迦の法身に色形

を認めているが、釈迦はあくまでも曼荼羅北方の尊格であるため、中台の大日如来とは異なるのである。したがって、釈迦の法身を大日と混乱させてはならない。また海雲の義については、海雲の師である義操の名は、呉殷の「惠果阿闍梨の行状」には見られない（空海の名は載っている）。この義操の弟子である海雲の説を、『纂』に載っている空海の「釈迦の三身と大日の三身はそれぞれ不同である」という説と相対させてはならない。問者の指摘した『貞元録』の具名については、ここに収録される多くの経典が釈迦説であるという観点から「釈教」としたのであり、このことによってあながちに難ずるべきではない」と反論する。

【原文】

釈迦・大日同体文事

大日経一唯心二云、尔時執金剛秘密主、復以偈問仏。云何世尊、説此心菩提生。……（中略）……唯大牟尼説文。

【訓読】

釈迦・大日同体の文の事

『大日經』一〈住心品〉に云く、「尔の時執金剛秘密主、復た偈を以て仏に問いたてまつる。云何が世尊、此の心に菩提の生ずることを説きたもうや。……（中略）……唯だ大牟尼説きたまえ」と文り。

【典拠】

(1) 『大日經』一…『大日經』卷一（大正一八・二頁上）。

【解説】

これより以下は、本条目の「釈迦と大日を同体と見か否か」という議論における、それぞれの立場の根拠となる経典、論書等の引用である。まず、「釈迦と大日を同体と見る」立場の典拠が五つ（『大日經』二文、『秘藏宝鑰』一文、『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』一文、海雲『両部大法相承師資付法記』一文）示される。

「釈迦と大日を同体と見る」立場の一つ目の典拠である『大日經』「住心品」の文は、執金剛秘密主が世尊たる大日如来に質問する場面であり、ここで大日如来（世尊）のことを、「大牟尼」と呼称している。

【原文】

同一具縁品云、真言勢無比。能摧彼大力、極忿怒魔軍、釈師子救世文。

【訓読】

同一①〈具縁品〉に云く、「真言の勢いは無比なり。能く彼の大力の、極忿怒の魔軍を摧く、釈師子救世なり」と文り。

【典拠】

(1) 同一・『大日経』卷一（大正一八・四頁中）。

【解説】

この『大日経』「具縁品」の文も、「釈迦と大日を同体と見る」立場の典拠である。ここでは、真言の力は偉大であり、釈師子救世主（釈迦）はおそろしい魔軍をも降伏させる、と説かれ、大日如来を釈師子救世と呼んでいる。

【原文】

宝鑰下云、守護経云、仏言、秘密主、我於無量無數劫中、修集如是波羅蜜多、至最後身六年苦行、不得阿耨多羅三藐三菩提成大毘盧遮那。……（中略）……鼻端想月輪、於月輪中作唵字觀。作是觀已、於後夜分得成阿耨多羅三藐三菩提^ス。

【訓読】

『宝鑰』⁽¹⁾下に云く、「『守護経』⁽²⁾に云く、仏の言く、秘密主よ、我れ無量無數劫の中に於いて、是の如き波羅蜜多を修集して、最後身に至りて六年苦行せども、阿耨多羅三藐三菩提を得て大毘盧遮那と成らざりき。……（中略）……鼻端に月輪を想い、月輪の中に於いて唵字の觀を作せ。是の觀を作し已て、後夜分に於いて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と文り。

【典拠】

- (1) 『宝鑰』下：『秘藏宝鑰』卷下（弘全一・四六三頁）。
- (2) 『守護経』：『守護国界主陀羅尼経』卷九（大正一九・五七〇頁下）。尚、中略部は「坐道場時、無量化仏猶如油麻遍満虚空。諸仏同声而告我言、善男子云何求成等正覚。我白仏言、我是凡夫。未知求処。唯願慈悲為我解説。是時仏同告我言、善男子諦聽。当為汝説。汝今

宜_下応_下当_下於_二（鼻端）想_二月輪_一、於_二月輪中_一作_中唵字觀_上。」である。

【解説】

「釈迦と大日を同体と見る」立場の典拠の三つ目。ここでは『秘蔵宝鑰』卷下（第九極無自性心）に引かれる、『守護国界主陀羅尼經』の文を挙げている。ここではまず、仏（釈迦牟尼）が、無量無數劫にわたって六波羅蜜行を修し、最後身に至って六年苦行したものの、無上正等覺を得て大日如来となることができなかったことが語られる。これを受けて諸仏は、釈迦牟尼に鼻端に月輪を想い、その中に唵字を觀ぜよ、と、唵字觀を修するように告げ、この唵字觀を修した釈迦牟尼が後夜分に無上正等覺を得（て、大日如来となっ）たことが説かれている。

すなわち、釈迦牟尼が唵字觀を経て大日如来となることが説かれるため、ここでは釈迦と大日が同体であることの典拠として示されているのである。

【原文】

出生義云、我能仁如来、……（中略）……遂却住自受用身、拋色究竟天宮、入不空王三昧、普集諸賢聖、削地位之漸階、開等・妙之頓旨。

【訓読】

『出生義』⁽¹⁾に云く、「我が能仁如来、……（中略）……遂に却て自受用身に住して、色究竟天宮に抛りて、不空王三昧に入り、普く諸賢聖を集め、地位の漸階を削り、等・妙の頓旨を開く」と文り。

【典拠】

(1) 『出生義』…『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』（大正一八・二九七頁下）。尚、中略部は「憫三有・六趣之惑、常由三蘊・界・入等、受三生死妄執、空華無而虚計、衣珠有而不知。於是乎、收跡都史天宮、下生中印土、起化城以接之、由糞除以誘之。及乎大種姓人、法縁已熟、三秘密教説時、方至」である。

(2) 能仁如来…釈迦牟尼のこと。支謙訳『仏説維摩詰経』卷下（大正一四・五三三頁中）に、「釈迦文、漢言能仁如来」とある。

【解説】

「釈迦と大日を同体と見る」立場の典拠の四つ目。ここでは、『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』に、能仁如来（釈迦牟尼）は自受用身に住して色究竟天に抛して大日如来所入の三昧である不空王三昧に入り、あまねく諸賢聖を集め、修行して得られる段階的な位を削り、速やかに等覚・妙覚の境地に到ったこと

が説かれ、釈迦が大日如来と同体であることが示されている。

【原文】

海雲記云、三蔵金剛智云、……（中略）……阿闍梨自云、從毘盧遮那如来即釈迦如来、是文。約法性身為名。

【訓読】

海雲の『記』に云く、「三蔵金剛智の云く、……（中略）……阿闍梨自ら云く、毘盧遮那如来（即ち釈迦如来なり。是れは法性身に約して名と為す）従り」と文り。

【典故】

（1）海雲の『記』…海雲『両部大法相承師資付法記』卷上（大正五一・七八三頁下）。尚、中略部は「我從南竺國、親於童智阿闍梨邊、伝得此金剛界百千頌經」。童智」であるため、引用文中の「阿闍梨」は童智を指す。

【解説】

「釈迦と大日を同体と見る」立場の典拠の五つ目。ここでは、金剛智の説として「毘盧遮那が釈迦如来であり、法性身の観点から釈迦を毘盧遮那と名づける」と説かれ、釈迦と大日が同一視されている。

【原文】

各別文事

大日經六釋尊云、尔時毘盧遮那世尊、告執金剛秘密主言、秘密主、若入大覺世尊大智灌頂地、自見住於三三昧耶句。秘密主、入薄伽梵大智灌頂、即以陀羅尼形、示現仏事。尔時大覺世尊、随住一切諸衆生前、施作仏事、演說三三昧耶句。仏言、秘密主、觀我語輪境界、広長遍至無量世界清淨門。如其本性表示隨類法界門。令一切衆生皆得歡喜、亦如今者釈迦牟尼世尊、流遍無尽虚空界、於諸刹土勤作仏事[×]。二教論下釈此文云、此文明大日尊三身、遍諸世界作仏事、亦如釈迦三身。釈迦三身・大日三身各各不同、応当知[×]。

【訓読】

各別の文の事

『大日經』六〈百字果相应品〉に云く、「尔の時に毘盧遮那世尊、執金剛秘密主に告げて言く、秘密主

よ、若し大覺世尊の大智灌頂地に入らば、自ら三昧耶の句に住するを見る。秘密主よ、薄伽梵の大智灌頂に入れば、即ち陀羅尼形を以て、仏事を示現す。尔の時に大覺世尊、隨いて一切の諸の衆生の前に住して、仏事を施作し、三昧耶の句を演説す。仏の言く、秘密主よ、我が語輪の境界を觀するに、広長にして遍く無量の世界に至る清淨門なり。其の本性の如く隨類の法界を表示する門なり。一切衆生をして皆な歡喜することを得せしむるは、亦た今の釈迦牟尼世尊の、無尽虚空界に流遍して、諸の刹土に於いて仏事を動作するが如し」と文り。

『二教論』⁽²⁾下に此の文を釈して云く、「此の文は大日尊の三身、諸の世界に遍じて仏事を作すこと、亦た釈迦の三身の如くなることを明かす。釈迦の三身・大日の三身は各各異なること、まさに知るべし」と文り。

【典拠】

- (1) 『大日經』六・『大日經』卷六（大正一八・四〇頁中）。
- (2) 『二教論』下・『弁頭密二教論』卷下（弘全一・五〇三頁）。

【解説】

これより以下は、「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の引用である。『弁頭密二教論』、『梵網經』、

『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』、『金剛頂經瑜伽十八会指帰』、『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』、『秘藏記』の六つの經典・論書から計八文が引用されている。

一つ目の『弁顕密二教論』の文は、『大日経』「百字果相应品」の、「毘盧遮那如来が執金剛秘密主に告げるに、如来の第十一地（等覚位）に入れば、発心・真智・大悲や仏・法・僧、法身・報身・応身等の各三法が平等であるという境地に住するのである。またこの地位に入れば、如来の普門身を得て仏の利他の行いを示すのである。このとき、仏は全ての衆生の前に住して仏事を行い、三平等の句を説く。この仏が言うには、私（仏）の言葉を観察してみるに、これは世界の隅々にまでゆきわたり、隔てられないことがない清浄なる手だてである。本来的に種々なる有情の世界を示す手だてである。この私（仏）の言葉によって、すべての衆生を歓喜させることは、釈迦牟尼が広大な虚空界に遍満し、あらゆる場所において仏事を行ずるようなことである」という引用文に対する割注である。

この『大日経』の文に対し、『弁顕密二教論』では、「この『大日経』の文は、大日如来の法・報・応の三身が、あらゆる世界に遍満して仏事を行ずることが、あたかも釈迦の三身のようであることを明かした文である。釈迦の三身と大日の三身はそれぞれ不同であることを知るべきである」と説かれ、釈迦と大日とを別体と見なす文言が示されている。なおこの文は、法身説法を認める密教説と法身説法を認めない顕教の説を示したものである。

【原文】

梵網經下云、我今毘盧仏、方坐蓮華台、周匝千華上、復現千釈迦。一華百億国、一国一釈迦、各坐菩提樹、一時成仏道。如是千百億、盧遮那本身、千百億釈迦、各撰微塵衆。俱來至我所、聽我誦仏戒。甘露門則開。是時千百億、還至本道場、各坐菩提樹、誦我本師戒、十重四十八^々。

【訓読】

『梵網經』⁽¹⁾下に云く、「我れ今毘盧仏、方に蓮華台に坐し、周匝せる千華の上に、復た千の釈迦を現ず。一華に百億の国あり、一国に一釈迦ありて、各の菩提樹に坐し、一時に仏道を成ず。是の如き千百億は、盧遮那を本身となし、千百億の釈迦、各の微塵の衆を撰す。俱に來りて我所に至り、我れの仏戒を誦するを聴く。甘露の門則ち開く。是の時に千百億、還りて本道場に至りて、各の菩提樹に坐し、我が本師の戒たる、十重四十八を誦す」と文り。

【典拠】

- (1) 『梵網經』下：鳩摩羅什訳『梵網經盧舎那仏説菩薩心地戒品第十』卷下（大正二四・一〇〇三頁下～一〇〇四頁上）。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の二つ目。この『梵網経』の文では、「蓮華台に坐する毘盧遮那仏の周りに千の蓮華があり、その一々の蓮華に釈迦が住している。更にその蓮華の一々には百億の国があり、その国それぞれに一人の釈迦が住して、それぞれ菩提樹下において成道している。これらの千の釈迦、百億の釈迦は中央の毘盧遮那を本身としており、また、その千の釈迦、百億の釈迦は、それぞれ微塵の衆を摂している。それらの釈迦は毘盧遮那のもとに至って、毘盧遮那の誦する仏戒を聴く。仏戒を受けた千の釈迦、百億の釈迦は、もとに戻りて、それぞれが菩提樹に坐し、十重四十八輕戒を誦す」と説かれている。すなわち、釈迦は毘盧遮那を本身としつつも、毘盧遮那とは別体であることが説かれている。

【原文】

二教論下云、守護国界陀羅尼經云、仏告秘密主言、善男子、此陀羅尼者、毘盧遮那世尊、色究竟天為天帝釈及諸天衆已広宣説。我今於此菩提樹下金剛道場、為諸国王及与汝等略説於此陀羅尼門_ノ。

【訓読】

『二教論』下に云く、『⁽¹⁾守護国界陀羅尼經』に云く、⁽²⁾私は秘密主に告げて言く、善男子よ、此の陀羅尼は、毘盧遮那世尊、色究竟天において天帝釈及び諸の天衆の為に已に広く宣説す。我れ今此の菩提樹下金剛道場に於いて、諸の国王及び汝等の為に略して此の陀羅尼門を説く」と文り。

【典拠】

- (1) 『二教論』下：『弁頭密二教論』卷下（弘全一・五〇三頁）。
- (2) 『守護国界陀羅尼經』：『守護国界主陀羅尼經』卷九（大正一九・五六五頁下）。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の三つ目。この文は『弁頭密二教論』の文とされているが、内容は『守護国界主陀羅尼經』の引用文である。ここには、「仏（釈迦）が金剛手秘密主に告げるには、この「守護国界主」と名づけられた陀羅尼は、毘盧遮那仏が色究竟天において帝釈天等の諸々の天衆のために広く演説したものである。私（釈迦）は今この菩提樹下の金剛座において、諸々の国王や汝らのためにこの陀羅尼法門を略説する」と説かれている。すなわち、この文は釈迦と大日とが別体であることを描写した記述である。

【原文】

出生義云、釈師子得毘盧遮那如来方便、而誓約伝金剛薩埵文。

【訓読】

『出生義』⁽¹⁾に云く、「釈師子は毘盧遮那如来の方便を得て、而も誓約して金剛薩埵に伝う」と文り。

【典拠】

(1) 『出生義』…『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』(大正一八・二九九頁上)。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の四つ目。この『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』の文には、「釈師子」すなわち釈尊が、大日如来の方便を受けて金剛薩埵へと密教を伝えたと言われている。すなわち、釈尊・大日如来・金剛薩埵を別体と見なしている。

【原文】

十八会指帰云、次復示現釈迦牟尼仏降於閻浮提、變化身八相成道。皆是普賢菩薩幻化[×]。

【訓読】

『十八会指帰』⁽¹⁾に云く、「次に復た釈迦牟尼仏を示現して閻浮提に降し、變化身八相成道す。皆な是れ普賢菩薩の幻化なり」と文り。

【典拠】

(1) 『十八会指帰』…『金剛頂経瑜伽十八会指帰』(大正一八・二八六頁上)。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の五つ目。この『金剛頂経瑜伽十八会指帰』の文には、「(大日如来は、) 釈迦牟尼仏を示現して人間世界に下し、その變化身(釈迦牟尼仏)は八相成道した。これはすべて普賢菩薩の神通力によって作り出したものである」と説かれている。つまり、大日如来が釈迦牟尼となつて閻浮提に降りたのではなく、大日如来が釈迦牟尼を示現して、それを降したと説かれている。すなわち、釈迦と大日を別体とみなしているのである。

【原文】

義決云、前之定門漸学大乘及小乘等、及於外道、同遊由此定。小乘以之為畢竟。外道不深各各有異。漸学大乘者、以為方便。息攀緣故。若頓入者、亦不由之。一切色塵為仏事故。色相境界智所転故。智性無礙無量用故。若怖於塵境愛樂空寂智無所用、愚拙之深網也。如此徒、其類非一。或作声聞、或為外道。悲哉。可愍。痛惜之甚。是故仏、説其智慧門難解難入、一切声聞・辟支仏所不能知。若欲入者、如下經中広宣説耳^ス。

【訓読】

『義決』⁽¹⁾に云く、「前の定門は漸学大乘及び小乗等、外道に及ぶまで、同じく此の定に遊由す。小乗はこれを以て畢竟と為す。外道は深からず各各に異なり有り。漸学大乘の者は、以て方便となす。攀縁を息るが故に。若し頓入の者は、亦たこれに由らず。一切の色塵を仏事と為すが故に。色相の境界は智の所転なるが故に。智性無礙にして無量の用あるが故に。若し塵境を怖れて空寂を愛樂すれば智に所用無く、愚拙の深網なり。此の如くの徒、其の類非一なり。或は声聞と作り、或は外道と為る。悲しいかな。慙れむべし。痛惜することの甚し。是の故に仏、其の智慧門は難解難入なりて、一切の声聞・辟支仏の知ることあたわざる所なりと説きたまう。若し入らんと欲はば、下の經の中に広く宣説するが如きのみ」と文り。

【典拠】

(1) 『義決』：『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上（大正三九・八一三頁上）。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の六つ目。この『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』の文には、「先に説かれていた禪定の門では、段階的に大乘へと到達した者、小乗の者から外道まで、みな同じように遊由する。ただし、小乗の者はここを究極の境地とし、外道はさらに浅い境地であるため様々である。漸く大乘へと到達した者は、ここを究極の境地ではなく方便であるとする。なぜならば、対象に捉われることをやめるからである。頓入の者も、同様に方便とみる。なぜならば、一切の色塵は仏の所作であり、色相の境界は仏智の転ずる所であり、また智性がさまたげなくすべての働きを具えていることを理解しているためである。もし（色塵が仏の所作、色相の境界が智慧の所転であることを知らず）、塵境を怖れて空寂を最上なものとしてとどまるのであれば、智に働きの対象がないことになってしまい、これは愚かなことである。このような者たちは様々にいて、これらが声聞や外道となる。これを憐れむべきである。このゆえに仏は、この智慧門は解し難く入り難く、すべての小乗の者の知らないところであると説かれた。もしここに入らんとするならば、下の経（六卷本『略出経』）の中に広く説かれている」と説かれている。

【原文】

又云、入是空三昧地時、不見身与心。内・外寂能現・所現皆同一大空。若声聞種性多者、於中沈住智不起動。外道於中起惡尋求、或見有辺、或見無辺、或見非有非無辺等、乃至各各別生於見等。菩薩於中智慧善巧建立種種微妙相用、入仏境界、得仏加持^文。

上文若欲入者等者、指此文所积経文也。

【訓読】

又^①云く、「是の空三昧地に入る時、身と心とを見ず。内・外寂にして能現・所現は皆な同一の大空なり。若し声聞の種性の多くは、中に於いて沈住して智の起動せず。外道は中に於いて惡尋求を起して、或は有辺を見、或は無辺を見、或は非有非無辺等を見、乃至各の各別に見等を生ず。菩薩は中に於いて智慧善巧にして種種の微妙の相用を建立し、仏の境界に入り、仏の加持を得たり」と文り。

上の文の「若し入らんと欲はば」等とは、此の文の积する所の経文^③を指すなり。

【典拠】

(1) 又云く…『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上(大正三九・八一四頁上)。

(2) 上の文…前出の『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上(大正三九・八一三頁上)の文を指す。

(3) 經文・六卷本『金剛頂瑜伽中略出念誦法』卷一(統天全密?・六五頁上)に、「見諸衆生^二有^一如^レ斯過^一。無^レ有^レ依怙、応^下生哀愍、為^中救度^上故、応^三當^レ現前作^レ阿婆頗那伽三摩地^一。行者、欲^レ入^三此法門^一者、於^二仏像前^一應^二先思惟^一。我^レ當^レ入^レ定。作^二此念^一已、不^レ應^レ動念及諸支節^一。唇齒俱合、兩目似^レ開。息^二心攀縁^一勿^レ令^レ散乱^一」とあることを指す。

『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』は、この六卷本『略出念誦經』を註釈したものである。六卷本『略出念誦經』については、清田寂雲『金剛頂略出念誦經』について一六卷本と四卷本の比較一(『印仏研』三〇一、一九八一)、三崎良周『金剛頂瑜伽中略出念誦經』についての一考察一(『天台学報』二四、一九八二)、清田寂雲『金剛頂略出經』について一六卷本と四卷本の比較一(『天台学報』二六、一九八四)、大正大学綜合佛敎研究所金剛頂經研究会『六卷本『金剛頂瑜伽中略出念法』の研究―慈覺大師將來本校訂訳註篇一(ノンブル、一九九九)、同『六卷本『金剛頂瑜伽中略出念法』の研究―別本(東寺觀智院本・石山寺本)翻刻篇一(ノンブル、二〇〇六)に詳しい。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の七つ目。ここでは、「この空三昧(阿婆頗那伽三摩地)に入ると、身体と心とを見ることなく、内外ともに空寂にして、現すものも現れるものもすべて同一の大空

である。声聞乗の者の多くは、阿婆頗那伽三摩地の中に住するのみで智慧が発動しない。外道の場合、阿婆頗那伽三摩地において悪法を尋ね求めてしまい、あるいは限界があると見たり無いと見たり、またあるいは限界は有るでもなく無いでもない等と見て、それぞれの者が別々の見解を生じてしまう。菩薩乗の者は、(声聞乗とは異なり)阿婆頗那伽三摩地において智慧を発動することができ、巧みに様々のすぐれた利他の作用のすがたをあらわして仏の境界に入り、仏の加持を得ることができると説かれる。

ここでは釈迦と大日とが別体であると直接表現されていないが、声聞(小乗)・外道・菩薩(大乘)が、同じ阿婆頗那伽三摩地に入った場合でも、その種の相違によって、得られるものが各別であると説かれ、「各別であること」が強調されている。

また、「上の文の「若し入らんと欲はば」等とは此の文の釈する所の經文を指すなり」とあるが、これは、前文の『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上(大正三九・八一三頁上)に、

【原文】 若欲_レ入者、如_二下經中_一広宣說_二耳。

【訓読】 若し入らんと欲はば、下の經の中に広く宣説するが如きのみ。

【和訳】 もしここ(阿婆頗那伽三摩地)に入らんとするならば、下の『經』の中に広く説かれている。

とあることについて、「下の『經』」が、六卷本『略出經』の文を指すとしているのである。

【原文】

秘藏記云、問。經云、釈迦即毘盧遮那。其心如何。答。譬如數穴闇屋燃灯之時、諸穴俱時放光。心王毘盧遮那成仏時、無數心主同時成仏。は無數心主各各別、各各垂迹樹下八相成道。然則釈迦是心王所心主釈迦迹。乃至世間出現一切仏菩薩、皆是各各心主之迹耳。雖歸本皆是毘盧遮那、拋三昧門、各各三昧之化。是故各各名別。是一三昧所具余三昧。如帝網之義。

【訓読】

『秘藏記』に云く、「問う。『經』に云く、釈迦は即ち毘盧遮那なりと。其の心如何。答う。譬えば數穴ある闇屋に灯を燃すの時、諸の穴は俱時に光を放つが如し。心王の毘盧遮那成仏する時、無数の心主も同時に成仏す。是の無数の心主は各々別にして、各々迹を樹下に垂れて八相成道す。然れば則ち釈迦は是れ心王の所の心主の釈迦の迹なり。乃至世間に出現する一切の仏菩薩は、皆な是れ各々心主の迹なるのみ。本に歸すれば皆な是れ毘盧遮那なりと雖も、三昧門に抛れば、各々三昧の化なり。是の故に各々に名別なり。是の一の三昧の所に余の三昧を具す。帝網の義の如し」と文り。

【典拠】

(1) 『秘藏記』…『秘藏記』(弘全二・四三頁)。なお、「秘藏記云」の右傍注には、朱書きにより「東寺

意釈迦即毘盧遮那事」【和訳】「東寺の意は釈迦は即ち毘盧遮那であること」とある。杲宝（一三三〇六～一三六二）『杲宝私抄』巻二の「釈迦大日二仏同異事」には、自門（東寺）は二仏を別体と見ると主張しながらも「自門意、又存二仏同体義」（真全一〇・二三頁下）【和訳】「自門（東寺）の意は、また釈迦と大日を同体と見る」とあり、東寺に両説が混在していたことが説かれている。

また、頼宝（一二七九？、一説、一三三〇没）『真言本母集』巻九の「大日釈迦同異分別事」（続真全一一・二二三頁下）では、二身同体の文証として、この『秘蔵記』の文が引かれている。

この文を東寺の学頭をとめた了賢は「釈迦と大日を別体と見る」典拠としているのであり、杲宝の説の通り、東寺に同体・別体の両義が混在していたことが指摘できるのである。

(2) 『経』…『観普賢菩薩行法経』（大正九・三九二頁下）の、「釈迦牟尼名_二毘盧遮那遍一切処_一」を指すか。勝又俊教『弘法大師著作全集』巻二（山喜房仏書林、一九七〇、六五八頁）においても、この『経』を『観普賢菩薩行法経』とみなしている。

【解説】

「釈迦と大日を別体と見る」立場の典拠の八つ目。ここでは、「経」（『観普賢菩薩行法経』と推定される）に「釈迦はすなわち毘盧遮那である」と説かれているが、その意味するところは何であるか」と

の問いに対し、「たとえば、数カ所に穴の開いた暗い部屋があったとして、その中で灯明をつけた場合、その穴から同時に光が放たれる。これと同じように、心王の毘盧遮那が成仏すれば、無数の心主（心数か？）の他の諸尊も同時に成仏する。この諸尊はそれぞれ別であり、各々菩提樹下で迹を垂れて八相成道する。したがって、釈迦は心王毘盧遮那の心数としての釈迦であり、世間に現れるすべての仏菩薩もそれぞれ心王大日の心数としての諸尊である。本来的にはこれらの諸尊はみな大日であるといっても、諸尊の三昧門はそれぞれ別であり、名称も異なっているのである。大日の三昧門に他の諸尊の三昧門が具足して、帝釈珠網のように連なっているのである。」と説かれている。

すなわち、大日如来に釈迦を含めた他の諸尊が具足しているものであり、その三昧門が各別であることから、釈迦と大日が別体であると主張するのである。

註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三二八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三九頁上〜三四〇頁上）に詳しい。
- 4 『真言宗全書』解題（二二六頁下〜二二九頁下）。
- 5 『他師破決集』卷二（真全三一・二五八頁上）。

6 『他師破決集』卷五（真全三一・三〇八頁下）。

7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性田親王歟」と推測している（二二九頁上）。

〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、『些些疑文』、大釈同異